

愛を読むひと

The Reader

2009年6月19日(金)TOHOシネマズ スカラ座ほか全国ロードショー

配給: ショウゲート

公式サイト: <http://www.aiyomu.com>

© 2008 TWCGF Film Services II, LLC. All rights reserved.

監督: スティーブン・ダルドリー (『めぐりあう時間たち』『リトル・ダンサー』監督)

製作: アンソニー・ミンゲラ/シドニー・歩ラック

原作: ベルンハルト・シュリンク 「The Reader」(独/英) 脚本: デヴィッド・ヘア

出演: ケイト・ウィンスレット(ハンナ・シュミッツ役)、レイフ・ファインズ(マイケル・バーグ役)、デヴィッド・クロス(青年時代のマイケル・バーグ役)ブルーノ・ガンツ(ロール教授役)、アレクサンドラ・マリア・ララ(子供時代のイラナ・メイザー役)

製作国: アメリカ/ドイツ 言語: 英語

●ケイト・ウィンスレットは本映画でアカデミー主演最高女優賞(オスカー賞)を獲得



◇復活祭の休みに自転車旅行にでかけたマイケルとハンナ

映画の解説

&

注目すべきシーンの英文セリフ

塚田三千代（映画アナリスト／映画英語教育学会）

マイケルは高校生の頃、ひと夏の‘生ある初恋’を体験するが、ハンナの突然の失踪による喪失感を味わう。映画はこれを序奏にして、ナチス政権下で起きた教会焼殺事件の告発を法廷で受けているハンナをクローズアップする。そして、この裁判をきっかけに、国家の法の正当性を研究するマイケルの人生が浮き彫りになる。『愛を読むひと』の原題は THE READER。‘本を読む人／読めない人’ということは、個人的なことを越え、国家自体をゆるがすことにもなりかねない、と次世代へ警鐘している。

監督は映画技法として、フラッシュバックや会話や映像のオーバーラップなどを多用して、暗い事件を薄膜で包みこみ、伝えたい真意をやや不透明にしているが、ともかく、クライマックスは法廷でのハンナの応答とこれを傍聴した教授と学生との討議である。そして、服役中のハンナに聞かせる朗読を録音するマイケルの姿とそのテープを聞きながら字の読み書きを習得するハンナの映像が次々にオーバーラップするシークエンス(連続シーン)である。文学では行間を読んで意味を深めるが、映画では、俳優の表情や映像を読んで意味を深めることが求められるが、主演女優ケイト・ウィンスレットはアカデミー・オスカー像受賞にふさわしい力量で、ハンナ役をみごとに演じている。

本映画は一回の鑑賞だけでは読み深めることの難しい映画作品になっているが。これは鑑賞者に2度も3度も観て、「世代にとらわれずに観る側で個々に理解して欲しい」と、監督が願っているからであろう。原作がドイツ語であるにも関わらず、英語で話させているのも、世界共通語である英語を使って、世界中の人たちにこの映画を観てもらいたい、という期待であろう。

—What’s an odyssey?

—It’s a journey. He sets out on a journey.

—They operate by something called law. You’re not guilty of anything merely by working at Auschwitz.

—Well, what would you have done?

Should I never have signed up at Siemens?

この映画では、上記のセリフが出現するシークエンスに注目したいが、その詳細はP.6「映画から選んだ、じっくりと味わいたいセリフのシーン」に載せることにして、まず、映画のストーリーを追ってみよう。大部分が原作を忠実に脚色されている。

【映画のストーリー】

本映画は、第 2 次世界大戦の終末期から戦後へと移りゆくドイツの社会背景を知れば、物語の深層がいっそう理解しやすくなる。ここでは年代を表記しながら時系列でストーリーを追ってみよう。



映画のストーリーは、1995 年、52 歳のマイケルの回想で始まる。

1958 年のベルリン。当時、ギムナジウム 6 学年のマイケルは下校途中で体調が悪くなり、ある女性に助けられる。市電の切符切りをしているハンナである。彼女は 1943 年に 21 歳でナチス政権下の親衛隊に入隊し、強制収容所の看守を務めたあと、戦後にベルリンへ来ていたのだが、マイケルは裁判の証言シーンを見学するまではこの事を知る由がない。

1945 年 5 月に第 2 次大戦で降伏したドイツの、敗戦からようやく復興途上にある都市ベルリン。2 人が出会った当時、ハンナは 38 歳、マイケルは 15 か 16 歳であった。下校途中で具合が悪くなった自分を介抱してくれた年上の女性の美しさにひかれて生ある恋に落ちてしまうマイケル。彼にとっては、母と息子ほどの年齢差は存外で、実母ならとても恥ずかしくて一緒に並んで歩くことなど出来ないが、ハンナとなら平気であった。そんなハンナのために本を朗読して‘生ある恋’に満ちた時を過ごすことが最高の喜びであった。





しかし、突然の別離… そして、

その後、に再会したのは マイケルが**1966年**、**Heidelberg Law School**に在籍中、法律ゼミで強制収容所裁判を法廷で見学したときであった。

この裁判でハンナは無期懲役の判決を宣告された。このとき、43歳のハンナは字を読めないことを隠し通し、他の看守の罪までも一人で背負ったために刑の軽減を受けることができなかった。傍聴席で一部始終を聞いていたマイケルは彼女の隠した真実に気付くのだが、彼はそれを言い出すことができない。

ちなみに、1963年12月から1965年8月にかけて、西ドイツでは「アウシュヴィッツ裁判」が頻繁に行われ、討論やデモ行進も賛否両論の立場でなされ、それがマスコミの関心を集めていた。マイケルの父親も戦争世代の人で、ナチス政権に批判や距離をおきながらも、人格と自由と尊厳などのモラルと法を分離する立場にいた。マイケルは情報を明かすべきか否かの迷いに一人で悩む。

やがて時を経て、マイケルは「第三帝国時代の法律」を専門とする法史学者になり大学の教授職に就く。1974年、妻と離婚し、幼い娘の養育をノイシュタットに住む母に託した後、独りで暮らすようになったマイケルは本の朗読をテープに録音して、服役中のハンナへ送ることを思いつく。これはハンナの服役8年後のことだが、それ以後、朗読の録音テープを10年間送り続けることになる。最初に送ったテープはホメロスの「オデュッセイア」である。

録音テープを受け取ったハンナはすぐに送り主がマイケルだと気付く。そして、自分で本を読むために字を覚えることに興味を持ち、独力で字を書けるようになる。51歳で始める手習い事は大変な努力であるが、彼女はそれを成し遂げた。そして、「アウシュヴィッツ裁版」の記録も読めるようになり、はじめて、マイケルに手紙を書く。筆跡は年長の人によくある書き方でとても力強かった。

1988年、恩赦で出所できることになったハンナにマイケルは再会する。そして尋ねる、“Have you spent a lot of time thinking about the past?” これに答えてハンナは、“Before the trial I never thought about the past. I never had to.” は答えた。かさねて、“What do you feel now?”と聞くと、“It doesn’t matter what I feel. It doesn’t matter what I think. The dead are still dead.”と答えるのだった。そして” **I have learned, kid. I’ve learned to read.**”と答えてくれた。

その1週間後、ハンナの社会復帰を手助けする準備をととのえて、迎えにきたマイケルを待っていたのは、その早朝に命を絶っていた。享年61歳。そして、自筆の遺書らしきものが残されていた。ベルリンの壁が崩壊(1989)して東西ドイツ連邦共和国になる前年のことであった。



映画のラストシーンは、丘の上の教会の裏の雑木林の木立の下にある HANNA SCHMITZ 1923-1988 と彫られた墓石の前で交わす父と娘ジュリアとの会話とそれに続くナレーションで終わる。

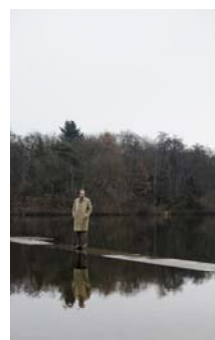
JULIA: Who was she?

MICHAEL: That’s what I wanted to tell you. That’s why we’re here.

ULIA: So tell me.

narration

I was fifteen. I was coming home from school. I was feeling ill. And a woman helped me.



映画から選んだ、じっくりと味わいたいセリフのシーン

映画全篇をとおしてぜひ耳を傾けたいシークエンスをとりあげる。この場面はセリフを英文でも味わっていただきたい。日本語訳は英語字幕ではないので、同時通訳式の日本語訳にした。

注目シーン1

ハンナに本を読んであげるマイケル。どんな本だろう？学校の宿題に出された作者ホメーロスの「オデュッセイア」。ところが、ハンナはこの世界的に有名な詩作品を知らないので、「長い冒険の旅って？」と聞いている。その後、マイケルは復活祭の休みに2人で自転車旅行に出かけよう、と提案する。ちょっとした会話だが、幸せに満ちあふれる2人を想像できよう。

MICHAEL (face off): “The Odyssey” by Homer. It’s my homework.

MICHAEL (voice over): “The Odyssey by Homer.

HANNA (off): **What’s an odyssey?** *長い冒険の旅

MICHAEL: **It’s a journey. He sets out on a journey.** *旅に出る

*“The Odyssey”：詩人ホメーロスの作とされる古代ギリシャの叙事詩で、「イーリアス」の続編。



注目シーン2

ハンナが失踪し、青年マイケルはが傷心して落ち込む。やがて歳月を経て、大学に進学して法律を専攻する。法律学のゼミで、当時、ひんぱんに行われていたアウシュヴィッツ裁判の一つをフィールドワークとして、担当教授に引率されて隣町の裁判所へ出かける。彼が想像もしなかったことであったが、起訴状により判事がハンナに事実を確認する。ハンナがそれを肯定するのを聞いてマイケルは愕然となる。マイケルとハンナの関係を何も知らないロール教授だがマイケルを気遣って声をかけている。

HANNA (off): I was working at Siemens when I heard the SS
was recruiting. *the Secret Service

シーメンスで働いていて、親衛隊で新人募集しているのを知りました。

JUDGE (off): Did you know the kind of work you'd be expected to do?

どんな仕事をするようになるか知っていましたか？

HANNA: They were looking for guards. I applied for a job.

看守を募集していましたので、応募しました。

JUDGE (off): And you worked first at Auschwitz?

最初はアウシュヴィッツでしたね。

HANNA (off): Yes.

はい。

JUDGE (off): Until nineteen forty-four.

1944年まで。

MICHAEL DROPS HIS HEAD. マイケルが頭をうな垂れる。

JUDGE (off) : Then you were moved to a smaller camp near Cracow?

その後にクラクフ近郊の小収容所へ移された。

HANNA (off): Yes.

はい。

Prof. ROHL (overlapping):(quietly) Are you okay? 大丈夫か？

JUDGE (off): You then helped move the prisoners west in the winter of
nineteen forty-four in the so-called death marches?

それから1944年の冬、西へ向かって囚人たちをいわば死の行進をさせて移動するのを手伝いをした。

MICHAEL (overlapping):(quietly) Yeah, I'm fine. ぼくは大丈夫です。

注目シーン3

次は帰路の列車の中で先ほどの審議を傍聴したロール教授が学生たちの感想を聞いている。アウシュヴィッツで働いていたということだけで犯罪者にすべきかどうか、合法か非合法か、など、**The question is never “Was it wrong?” but “Was it legal?” And not by our laws. no, by the laws at the time.** 議論しているシーンである。

Prof. ROHL: So what did you think?

ところで君たちはどう思う？

MICHAEL: I don't know. (pause) It wasn't quite what I expecting.

分かりません。何も予期していませんでしたのでさっぱり。

Prof. ROHL: Wasn't it? In what way? What were you expecting?

そうかな？どんなふうに？なにか感じることは？

DIETER: I thought it was exciting.

ドキドキする事件だと思いました。

Prof. ROHL (off): Exciting? Why? Why did you think it exciting?

ドキドキするって？なぜ？ドキドキする事件だとなぜ思った？

DIETER: 'Cause it's justice.

正義があるからです。

Prof. ROHL (voice over):

Societies think they operate by something called morality, but they don't.

社会はモラルによって動いているが、そうでないことも。

They operate by something called law. You're not guilty of anything merely by working at Auschwitz.

法によって動くこともある。アウシュヴィッツで働いていたというだけでは罪にならない。

Eight thousand people worked at Auschwitz.

8000人もアウシュヴィッツで働いていた。

Precisely nineteen have been convicted, and only six for murder. To prove murder you have to prove intent.

詳細は19人が有罪判決で、6人だけが殺人罪だ。殺人罪を立証するにはその動機を立証しなければならない。

That's the law. The question is never “Was it wrong?” but “Was it legal?” And not by our laws. no, by the laws at the time.

それが法律だ。問題は「悪かったか」でなく「合法だったか」だ。我々の法によるのではなく、いや、当時の法律によるのでもない。

DIETER: But isn't that narrow?

それは狭くありませんか？

Prof. ROHL: What?

なんだって？

Prof. ROHL : Oh, yes. The law is narrow. On the other hand suspect people who kill other people tend to be aware that it's wrong.

まあ、そうだ。法律は狭いが、一方で、殺人者は悪いと気付いているはずだと嫌疑をかける。

注目シーン4

起訴事実を確認するため、判事がハンナに誘導尋問をし、ハンナは凛々しく真実を伝えて判事に応えている。だが、囚人が死ぬことを分かっているのになぜ送り出したのか、という核心を質問されたハンナは答えに窮して、自分に不利になることも考えずに判事に向かって What would you have done? と質問してしまう。見逃せないシーンである。

JUDGE (off): And so far, each of your fellow defendants has specifically denied being part of that process.

これまでのところ、被告のみなさんはとくにこのことへの参加を否定しています。

Now I'm going to ask you. (pause) Were you part of it?

ところで尋ねますが、あなたは参加しましたか？

HANNA: Yes.

はい。

JUDGE: So you helped make the selection?

それであなたは選別する手伝いをしましたか？

HANNA: Yes.

はい。

JUDGE (off): You admit that?

それを認めますか？

JUDGE: Then tell me...how did that selection happen?

選別をどのように行ったか話してくれませんか？

HANNA (off): There were six guards, so... we decided we'd choose ten people each. That's how we did it every month. We'd all choose ten.

看守は6人なので、私たちが決めてそれぞれ10人選び、毎月やっていました。皆で10人選びました。

JUDGE (off): Are you saying your fellow defendants took part in the process?

あなたは仲間の被告たちもこれに参加していたというのですか？

HANNA: We all did

全員でした。

CAMERA RACKS FOCUS ONTO THE DEFENDANTS AS THEY REACT, SHAKING THEIR HEADS.

JUDGE (off): Even though they've denied it? Saying "we," "we all" is easier than saying "I," "I alone" isn't it, Miss Schmitz?

皆が否定していても？「私たち」とか「私たちみな」の方が「私」とか「私だけ」はしませんというより言い易いからですか、シュミットさん？

JUDGE: Did you not realize that you were sending these women to their deaths?

あなたは女囚人たちを死なせることになるかと認識していなかったのですか？

HANNA: Yes, but there were new arrivals, new women were arriving all the time, so...the old ones had to make room for the new ones.

はい。でも新しい到着者がいましたので、新しい女囚人たちがどんどん到着するので、古い囚人は新しい囚人に場所を明け渡さなければなりませんでした。

JUDGE: (exhales) I'm not sure you understand.

言っていることがよく分かりませんが。

HANNA (off): But we couldn't keep everyone. There wasn't room.

全員を収容できませんでした。部屋がなかったのです。

JUDGE (off) (overlapping): No. but what I'm saying. Let me rephrase.

いや、私が言っているのは。繰り返しますが、

To make room, you were picking women out and saying "You, you and you have to be sent back to be killed."

部屋を空けるために女囚人を選んで、「あなたやあなたとあなたは送り返されて死ぬのよ」と言っていた。

HANNA: Well, what would you have done?

あなたならどうなさいましたか？

HANNA (off): Should I never have signed up at Siemens?

私はシーメンスの工場書類に署名しなければよかったのでしょうか？



監督と談話する主演女優ケイト・ウィンスレット



Director STEPHEN DALDRY
スティーヴン・ダルドリー監督